

## 諏訪之瀬島の火山活動解説資料

福岡管区気象台  
地域火山監視・警報センター  
鹿児島地方気象台

＜噴火警戒レベルを3（入山規制）から2（火口周辺規制）に引下げ＞

御岳<sup>おたけ</sup>火口では、昨年（2022年）9月下旬から10月中旬にかけて爆発が増加するなど、噴火活動が活発化していましたが、その後爆発は減少し、噴火活動は低調な状態で推移しています。その他の観測データにも火山活動の活発化を示す変化はみられていません。

諏訪之瀬島では御岳火口中心から1kmを超える範囲に影響を及ぼす噴火が発生する可能性は低くなったと判断し、本日（24日）11時00分に噴火警戒レベルを3（入山規制）から2（火口周辺規制）に引き下げました。しかしながら、現在も噴火活動が継続していることから、御岳火口中心から概ね1kmの範囲では、噴火に伴い大きな噴石が弾道を描いて飛散する可能性があります。

### 【防災上の警戒事項等】

御岳火口中心から概ね1kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒してください。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

### ○ 活動概況

御岳<sup>おたけ</sup>火口では、昨年（2022年）9月下旬から10月中旬にかけて爆発が増加しましたが、その後は減少し、11月16日以降発生していません。また10月や11月には噴煙の高さが火口縁上2,000mを超える噴火が観測されましたが、12月以降は概ね火口縁上1,000m程度で経過しています。御岳火口中心から1km付近まで大きな噴石を飛散させる噴火は昨年10月21日以降、観測されていません。現在、噴火活動は低調な状態で推移していると考えられます。

1月11日に海上自衛隊第1航空群の協力によって実施した上空からの観測では、御岳火口から灰白色の噴煙が上がっていることを確認しました。

昨年6月頃から11月頃にかけて、島の西側やや深部におけるマグマの蓄積量の増加によるものと考えられる、諏訪之瀬島の西側が震源と推定される火山性地震の増加や、地殻変動が観測されていました。11月頃からはマグマの蓄積量の更なる増加と推定される地震の増加や地殻変動は認められていません。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページ（[https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/monthly\\_v-act\\_doc/monthly\\_vact.php](https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php)）でも閲覧することができます。

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/kaisetsu/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、京都大学、東京大学及び十島村のデータも利用して作成しています。資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』を使用しています。

諏訪之瀬島では御岳火口中心から1 km を超える範囲に影響を及ぼす噴火が発生する可能性は低くなつたと考えられますが、現在も噴火活動が継続していることから、火口中心から概ね1 km の範囲では、噴火に伴い大きな噴石が弾道を描いて飛散する可能性があります。



図1 諏訪之瀬島 警戒が必要な範囲

御岳火口中心から概ね1 kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒してください。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

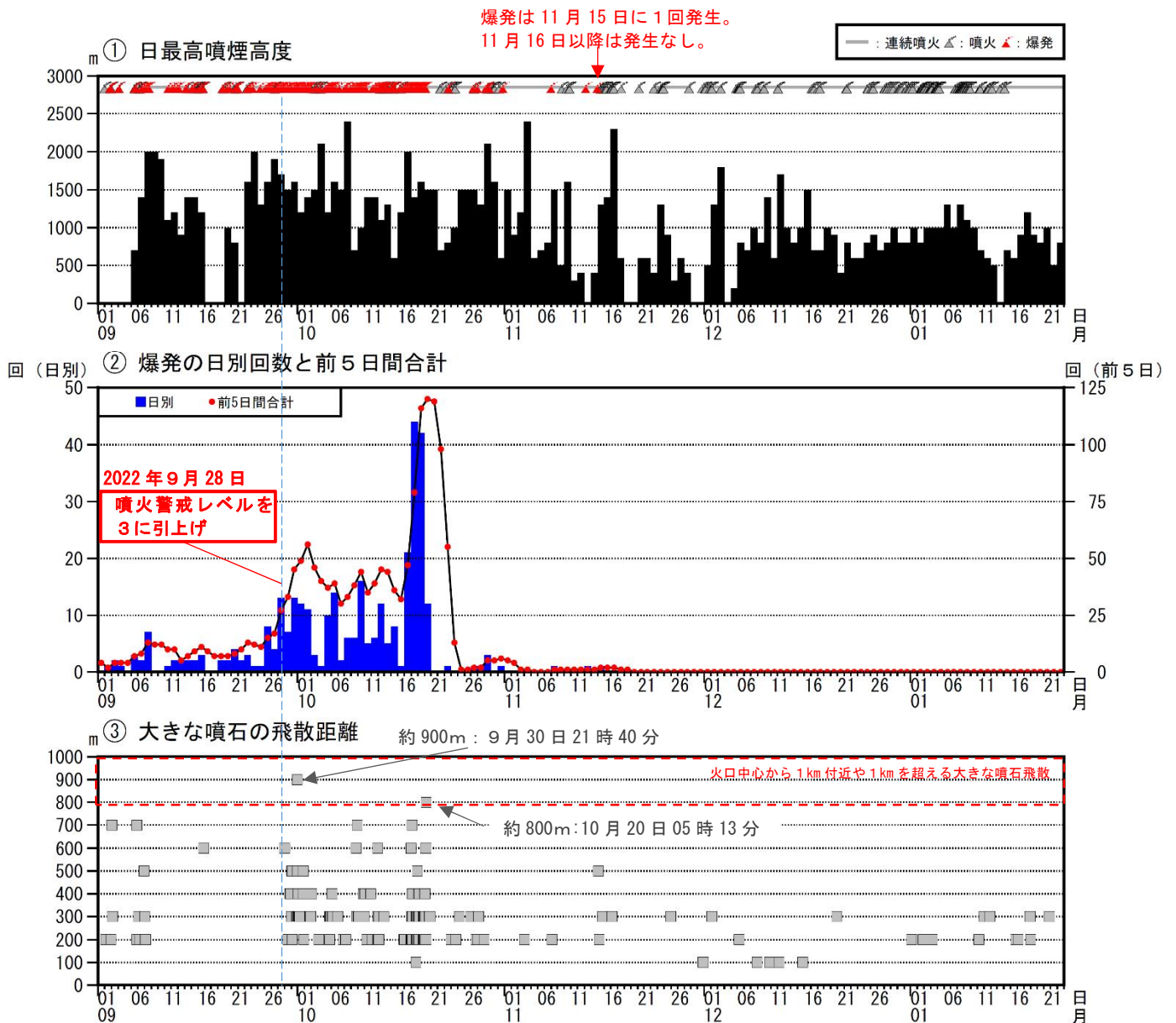


図2 諏訪之瀬島 爆発の日別回数及び噴石の飛散距離（2022年9月～2023年1月23日）

- ・ 昨年（2022年）9月下旬から10月中旬にかけて爆発が増加しましたが、その後は減少し、11月16日以降発生していません。
- ・ 昨年10月や11月には噴煙の高さが火口縁上2,000mを超える噴火が観測されましたが、12月以降は概ね火口縁上1,000m程度で経過しています。
- ・ 御岳火口中心から1km付近まで大きな噴石を飛散させる噴火（下段図中赤破線内800m以上飛散）は昨年10月21日以降、観測されていません（9月30日に約900m、10月20日に約800mまで飛散）。

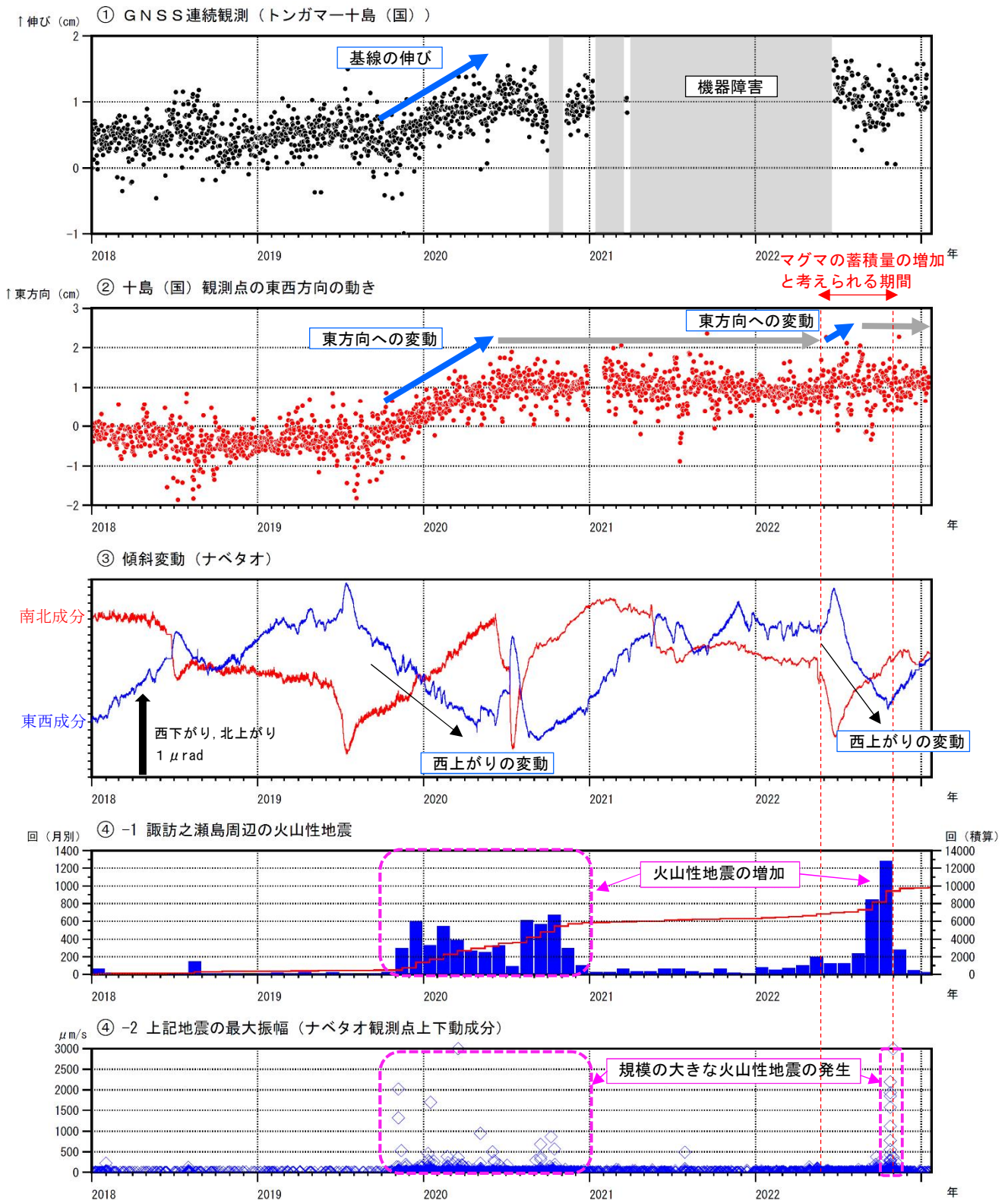


図3 諏訪之瀬島 諏訪之瀬島内の地殻変動と周辺の火山性地震(2018年1月~2023年1月23日)

昨年6月頃から11月頃にかけて、島の西側やや深部におけるマグマの蓄積量の増加によるものと考えられる、諏訪之瀬島の西側が震源と推定される火山性地震の増加や、地殻変動が観測されていました。11月頃からはマグマの蓄積量の更なる増加と推定される地震の増加や地殻変動は認められていません。

①の基線は図6の①に対応しています。

トンガマ南西観測点の地震計の機器障害により、ナベタオ観測点または御岳南山腹観測点で計数している期間があります。

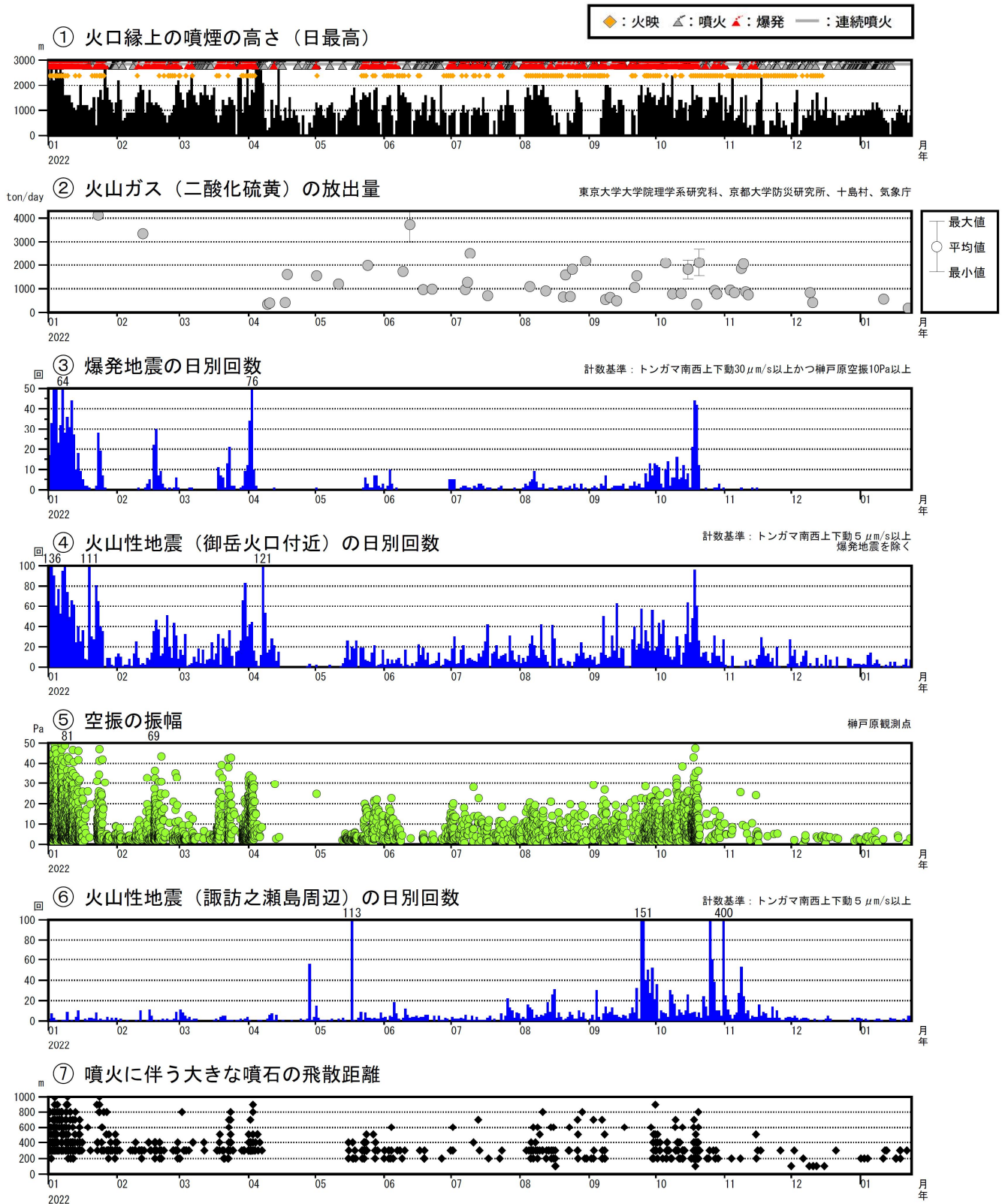


図4（前ページ） 諏訪之瀬島 最近の火山活動経過図（2022年1月～2023年1月23日）

- ・ 昨年（2022年）9月下旬から10月中旬にかけて爆発が増加しましたが、その後は減少し、11月16日以降発生していません。
- ・ 昨年10月や11月には噴煙の高さが火口縁上2,000mを超える噴火が観測されましたが、12月以降は概ね火口縁上1,000m程度で経過しています。
- ・ 東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、十島村及び気象庁が実施した観測では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、1日あたり2,000トンを上回る日が時々みられましたが、昨年12月以降は1,000トンを下回って経過しています。
- ・ 諏訪之瀬島の西側で発生していると推定される火山性地震は昨年5月頃から11月頃にかけて増加しましたが、11月頃からは少ない状態で経過しています。
- ・ 御岳火口中心から1km付近まで大きな噴石を飛散させる噴火は昨年10月21日以降、観測されていません。

東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、十島村及び気象庁は2019年12月より火山ガス（二酸化硫黄）放出量の観測を始めました。

トンガマ南西観測点の地震計の機器障害により、ナベタオ観測点または御岳南山腹観測点で計数している期間があります。



図5 諏訪之瀬島の状況（海上自衛隊第1航空群P-1から撮影）

1月11日に海上自衛隊第1航空群の協力によって実施した上空からの観測では、御岳火口から灰白色の噴煙が上がっていることを確認しました。



図6 諏訪之瀬島 観測点配置図とGNSS連続観測による基線番号

小さな白丸(○)は気象庁、小さな黒丸(●)は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。  
(国):国土地理院、(京):京都大学